

小児リウマチ性疾患の治療は

リウマチ性疾患は慢性の炎症性疾患であり、様々な臓器にダメージが生じる前に適切に開始されることが大切です。

治療は長期間継続することも稀ではないため、正確な診断が求められます。必要以上の治療による体への負担を避けるために重要です。

とくに小児の場合には、心身ともに成長する時期に治療を行うことから、これらの問題に十分配慮をする必要があります。

リウマチ性疾患の治療は 近年大きく進歩しました

抗リウマチ薬による治療で
十分な効果が得られない
若年性特発性関節炎(JIA)の
患者さんに、生物学的製剤が
導入され、予後の大幅な改善が
はかられました。



小児のリウマチ性疾患はまれな病気

これらの小児にみられるリウマチ性疾患は非常にまれな病気（日本中で数千人）です。このため専門医は少なく2009年現在で日本全国でも55人とどまります。

診断名	人口100万人あたりの患者数 (有症率)
若年性特発性関節炎(JIA)	2050人 (0.2%)
全身性エリテマトーデス(SLE)	150人 (0.02%)
若年性皮膚筋炎(JDM)	15人 (0.002%)
血管炎	100~200人 (0.01~0.02%)

(Patricia Woo ら Pediatric Rheumatology in Clinical Practice 2007)

(Kelly's Textbook of Rheumatology 8th ed. 2008)

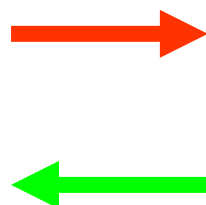
(G Magadue-Joly ら Ann Rheum Dis 1995 ; 54 : 587-90)

専門の医療機関を受診するタイミング

- 1. リウマチ性疾患の可能性があるが、まだ診断がついておらず、専門医に一度相談を試みたい。**
- 2. 膠原病の診断で治療を受けているが通常の治療では改善せず、専門的な治療の必要性があるかもしれない。**
- 3. 生物学的製剤などの最新の治療を、小児への投与の経験が豊富な施設で受けたい。**

医療連携を大切にしています

かかりつけ医



専門診療

日常の診療

状態が安定した後の日常診療
予防接種
寛解後のかかりつけ医

リウマチ性疾患の治療

鑑別診断と診断の確定
長期的な治療方針の作成
生物学的製剤などの投与
増悪時の入院治療

リウマチ性疾患の治療中も、かかりつけ医の存在は大変重要です。当院ではかかりつけ医の先生からの紹介状をお持ちいただくことをお勧めしています。